

特集◎今、何が問題か

魂の幸福を語り合うこと

張 競

(明治大学教授)

Kyo Cho

1953年上海生まれ。華東師範大学卒業、同大学助手を経て1985年来日。東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。著書に『恋の中国文明史』(筑摩書房、読売文学賞受賞)、『近代中国と「恋愛」の発見』(岩波書店、サントリー学芸賞受賞)など。

限界に近づいた消費神話

振り返ると、二〇一一年は文字通り多事の秋であり、悲嘆や挫折感とともに長らく記憶にとどまる年になるであろう。世界を見回すと、東南アジア、南アジアや中米諸国は立て続けに豪雨と洪水に襲われ、日本では東日本大震災で二万人近くの尊い人命が失われた。金融危機で

深手を負ったアメリカはまだ不況から立ち直つておらず、いまだに高い失業率に喘いでいる。ヨーロッパではギリシアが実質上財政破たんし、イタリア、スペイン、ハンガリーなどにも国家破産の暗雲が垂れ込めている。中東は内政不安に陥り、南米は相変わらず深刻な治安問題に悩まされている。中国は見かけの繁栄とは裏腹に、エリート層から一般庶民にいたるまで、いまにも急成長の崖から大不況の谷底に陥るのではないかという恐怖心

に戦^{おの}っている。不安という名の深い霧は世界中を覆い、将来については明るい展望がまったく見えない。「未来」という言葉はかつて進歩と幸福の寓意として語られていたが、いまや人口爆発、環境破壊、資源枯渇や地球温暖化など負の側面ばかりを連想させるものになった。世界終末を題材にした映画をはじめ、地球滅亡の話題が人気を呼んだのもただの偶然ではない。世界の破滅が娯楽の対象として消費されている裏には、空想が現実になることへの漠然たる予感と畏怖の心理が働いているのである。近代以来、人類がこれほどまでに自信を喪失した時代はいまだかつてない。

そんなときに、ある小さな国が世界の注目を集めた。ヒマラヤ山脈中にあるブータン王国である。十一月にブータン国王の訪日と相まって、「国民総幸福量」が話題となった。物質生活は必ずしも豊かではないが、ブータン国民の九十七パーセントが幸せを感じている。そのことは日本だけでなく、アメリカの主要テレビでもほぼ同じ時期に報道されていた。事件性がまったくないのに、先進国のメディアが一斉に扱うのは意味深長である。山奥のアジアの小国はかつて「発展途上国」と呼ばれ、いず

れは欧米の普遍的価値を受け入れざるをえないだろうと思われていた。しかし、いつの間にか先進国の人たちの感覚に大きな変化が生じている。このマインドの大転換は何を意味しているのか。むろん、欧米の慢性的な経済疲弊は一つの背景であろう。しかし、理由はそれだけではない。消費神話が限界に近づいていることに、一般の市民も気付いたのではないか。

すべてはベルリンの壁の崩壊に始まった。東西ドイツを分けるこの人工的な構造物の消失によって、音を立てて倒れたのは社会主義国家だけではない。社会主義という支柱の消失によって、資本主義もまた機能不全に陥った。それまで、社会主義陣営が存在していたおかげで、資本主義はその効率性を最大限に発揮し、自由経済の構造的な欠陥を外部に転嫁させることに成功していた。むろん、戦後、欧米や日本といった先進工業国ではケインズの経済理論にもとづき、政府によって市場調整が行われていた。公共政策の実施によって、生産能力の過剰という問題がかなり緩和された。一方、社会主義国家の生産性低下と慢性的な物資不足は常時、巨大な需要を作り出し、資本主義側は生産過剰を調整する必要性が著しく